

# 神奈川の中世城館(4)

中世研究プロジェクトチーム

はじめに

これまで「神奈川の中世城館」と題し、基礎データの集成から始め、前回・前々回では城館<sup>(1)</sup>の堀に注目し、規模・形態・年代などの基礎集成を行ってきた。中世城館は発掘調査成果をもとにする考古学の他に、文字資料を主とした文献史学や縄張り図など城郭の表面観察を重要視する縄張り研究など多方面から研究が行われている。今回は、これら膨大な先行研究から県内の城館、特に堀に関する研究について考古学の成果を中心としてまとめることで、今後の考察につなげることを目的とする。研究史をまとめるにあたり、前述のキーワードに関する研究を概観し、次に発掘調査報告書が刊行されている遺跡のなかから、その成果と考察についてまとめることにする。

## 1. 堀に関する研究略史

### (1) 中世前期

#### 鎌倉

鎌倉では、鎌倉時代初期から堀またはそれと推測される大溝が発見されており、形状は葉研形<sup>(2)</sup>を呈していることが多い。発見された場所は、幕府関連施設（大倉幕府跡（熊谷 2011）、北条小町邸跡（馬淵ほか 1996）、政所跡（宮田・手塚 1991））や御家人の屋敷（47）<sup>(3)</sup>、鶴岡八幡宮（大三輪ほか 1983）と複数地点あり、当地の支配者層と関連が指摘されている（岡 2006）。また、この鎌倉時代初期には大倉幕府周辺遺跡群（馬淵 1993）で大型柱穴列も見つかっており、大型の板塀または柵列が推測されている。このように重要施設を囲むのは、堀（溝）以外にも板塀や柵列があったことは分かっているが、狭小な調査が多く、どのように囲んでいたのかという配置や規模、その組み合わせなど不明な点もある。

御所や北条邸など幕府中心施設周辺の主要道路の側溝は、素堀の溝から木組みの溝へと変化することが指摘され、これらは御所が大倉から移転する13世紀前半から見られるという（宇都 2010）。この木組み側溝は主要道路以外に今小路西遺跡（46）などの屋敷地でも見られ、板塀や築地などを伴っていることもある。これら木組みの側溝は、区画や排水を主とした機能が指摘され、前述の葉研形の堀（溝）とは異なる性格を語られることが多い。主要道路や屋敷地を囲う堀（溝）の変化については、社会の安定に伴い目的が変化したとの指摘もある（岡 2006）。

鎌倉を囲む丘陵には平場、堀切、切岸などが見られ、『玉葉』に記された「鎌倉城」という表現や『吾妻鏡』などに記される戦闘状況から、その軍事性が評価されてきた（赤星 1959、石丸 1978など）。しかし、「鎌倉城」と称されるのは治承・寿永の内乱期のみであり、防御性を評価したものではないといい（中澤 1999）、近年の発掘調査や踏査による成果では、14世紀から15世紀の遺構・遺物が多く、城郭や城館として把握することは困難であるという（鈴木・菊川ほか 2001、齋木 2006）。各所に見られる堀切については、尾根越え

通路としての視点からも分析が行われており、軍事以外の利用が時代を超えて続けられていたものもあると指摘されている（岡 2004）。「要害」としての評価は、各遺構の機能や年代について更なる精査が求められているといえよう。

#### 鎌倉以外の県内

近年の発掘調査成果から、西日本では12世紀末頃から堀と土塁を有し、防御性を強化した居館がみられるが（中井 1991、広瀬 1988・2006）、関東では中世前期の武士の居館は相対的に開放的な様相を示しており、「土塁＋堀」という防御系圍繞施設をもついわゆる「方形館」の出現は、基本的に中世後期に入ってからであると指摘されている（橋口 1987ほか）。橋口によると、東国中世前期の屋敷・居館は大きく4類型に分けることができ、13世紀後半から徐々に変化し、15世紀に入ってから大きく転換するという（橋口 2005）。

①規模的に卓越する主屋中心とした建物群の周囲を生垣で圍繞しており、屋敷と周辺部は総じて開放的である。区画施設のあり方で生垣・柵・塀・境堀（溝）と堀で圍繞するタイプに細分可能であり、前者は12世紀後半から14世紀前半、後者は13世紀後半から15世紀前半までみられる。県内では綾瀬市宮久保遺跡（113）がこれに該当する。

②小谷を包み込む丘陵尾根上に堀をめぐらし、小谷出口正面の河川まで取り込む。12世紀後半から14世紀半ばまでである。

③台地上および河川に接する沖積部を一体のものとして略方形に区画する。12世紀後半から15世紀前半まで継続する可能性がある。県内では横浜市堀之内東遺跡（近藤ほか 1989）が該当する。

④二重方形区画を持つ居館。13世紀後半からみられる。

これら4類型を堀から注目すると、何れも土塁は伴わず、一義的には防御機能として評価することは難しいとしている。また、②に比べ③は相対的に堀の規模が大きい。断面形態は菓研形から箱菓研形へという時間軸上での変化が想定されている（橋口 2004）。

県内では、上記以外の中世前期の居館として海老名市上浜田遺跡（108）や秦野市東田原中丸遺跡（霜出 2006、90）があげられる。これまでの発掘調査では、ともに防御性を有したと考えられる堀は検出されていない。今後の調査にもよるが、上浜田遺跡が①、東田原中丸遺跡が③に該当すると推測され、大局としては橋口分類の範疇に収まると考えられる。

防御という意味での堀は人間からの攻撃を想定しているが、それに加えて野生動物との攻防についても指摘がある（中澤 2006）。発掘調査で検出される遺構は一部であることも多く、この機能や利用を特定することは困難であろう。しかし、注目すべき視点といえ、これまで堀としての防御性を疑問視され、区画として報告された溝などについても、再度検討する必要があるのかもしれない。

#### （2）中世後期

##### 県内の居館

15世紀後半以降、東国では中世前期からの系譜をひく屋敷や居館が消え、堀と土塁を備えた方形居館が出現する（橋口 1987ほか）。このような防御性を重視した居館の流れは東国に限らず、西日本でも顕著になるという（広瀬 2006）。

東国の方形館には空堀と水堀のものが存在し、水堀には灌漑機能を担っていたと考えられるものもある。

また、方形居館は単郭以外に複郭のものもみられる。主郭部分が基本的に方形プランを呈しつつも、周囲に複数の郭を配置しており、平地城郭の祖形になるものもあると指摘されている(橋口 2005)。

県内の居館では、茅ヶ崎市上ノ町遺跡(119・120)と清川村宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷遺跡(市川ほか 1993ほか)について方形居館の比較考察が行われている(富永 2009)。堀を中心に見てみると、上ノ町遺跡の居館は16世紀中頃が最盛期とされ、主郭を囲む方形の内堀と複数の郭を囲む外堀が存在する。内堀は幅2～3m、深さ1～1.4mほどで、間隔をあけて二重に廻っていた可能性がある。外堀は内堀に比べ大きく、幅5m以上、深さ1.5m以上となる。内堀・外堀とも土塁の存在は確認できなかったが、外堀は柵列を伴っており、防御性を備えているという。内堀と外堀の間には幅2～4mほどのやや大きい区画溝によって複数の郭を形成している。これら堀や区画溝は灌漑・排水の機能も有していたと指摘されている。なお、外堀は略方形を呈していたと推測されるが、北側に流れる小出川や低湿地が自然の防御施設となっていた可能性もあり、四方を圍繞していたのか不明な点もある。表の屋敷遺跡の居館は16世紀に成立したとされ、最大幅4.8m、深さ2.4mの堀により三方を囲まれる。北側には堀が存在せず、東西方向の開析谷を代用としている。土塁は検出されなかったが、堀の覆土から土塁を切り崩して埋め立てた状況が確認されているので、本来は内側に存在していたといえる。また、堀は用水路として利用していた可能性もある。

この二遺跡から復元された方形居館に共通する点は、居館(主郭)の規模が一辺100m足らずということである。また、堀の一部は自然地形を利用している点も注目しておきたい。このほかに、居館周辺に階層差のある家臣の宅地が見られ、別宅が16世紀後半に寺として転用されることも共通するといいい、戦国期の神奈川における地域支配の一形態との指摘がある(富永 2006)。

## 県内の城郭

15世紀後半以降、全国的に戦国時代に入り、軍事的な緊張が多くなるなか、防御性を重視した城館が増える様相は前述のとおりである。ここでは県内の城郭のうち、前述の居館に含まれない平地の城や山上に築造された城を中心に取り上げることにする。

城郭研究には考古学、文献史学、縄張り研究など多方面から進められてきた。特に近年では、これまで後北条氏の典型的な城と理解されてきた杉山城が発掘調査の結果、15世紀末から16世紀初頭の上杉氏の城郭として報告された。この「杉山城問題」を契機に様々な分野の研究者によって議論が深められ、研究の共通点や問題点が明らかになったことは重要であろう(藤木監修 2005、峰岸・萩原編 2009)。

また、近年では各戦国大名の特徴的築造技術について、独自の技術として成立していたのか疑義が指摘され(佐々木 2008、萩原 2010)、その領国のみで完結するものではなく、広範に認められることが指摘されている(齋藤 2003・2008)。県内に関わるものであれば、後北条氏に特徴的といわれた角馬出についてもその一例である(八巻 1990、佐々木 2010)。

さて、改めて城郭の堀に注目すると、縄張り研究で堀を扱う場合、曲輪の配置など城郭総体を述べるときに合わせて触れられることが多い(西股 2001など)。また、堀の配置から分類・分布の特徴を見ることで構築背景に迫る論もある(千田 1989)。それは各遺構のパーツ論、それが集まって構成する城郭の空間、そしてその背景となる軍事性を研究するという特質からであろう。

考古学から堀を述べる場合、発掘調査報告書の考察で取り上げられることが多い。特に障子堀については山中城跡(鈴木 2010)や深谷城跡(永井・吉田 2006)で形態や規模で分類も行われている。さらに、千葉

県内外の障子堀について、堀底の形態分類による編年試案が示され（井上 2000）、本プロジェクトでも参考にしている。県内に関わる項目を要約すると、以下のとおりである。

- ・障子堀そのものは15世紀前半から出現し、東北から関東に掛けて広く分布する。
  - ・16世紀後半には後北条領国化した地域に多い。
  - ・明から後北条氏関係する城郭では、障壁が規則的に連続し、方形の竪穴が一行に連続する。
- といった特徴が見られるという。

一方、県内の城郭に関して、発掘調査成果は増加しているものの、堀に関する論考は少ないといえる。そのような中、近年では後北条氏の城郭について発掘調査から築造技術にせまる試みが行われた（東国中世考古学研究会 2010）。その中から小田原城関連の堀について触れておきたい。小田原城には、文献史料と考古学の発掘成果から名称と構築年代が確認できる事例があり、三の丸新堀、総構堀がそれにあたる。三の丸新堀は天正15年（1587）6月以前に構築されたものであり、総構堀は天正15年6月から天正18年（1590）までの間に成立した堀であるという。これらの堀からは堀障子が確認されている。後北条氏が小田原に構築した堀は、法面が直線的に仕上げられ、角度は鋭角である。コーナーなどの稜線は筋が真っ直ぐ通るといった特徴が見られる。障子堀は一定の高さで地山を堀残して構築し、上端部に水をオーバーフローさせるための溝を刻み、水堀として機能していたと推測されている（佐々木 2010）。

小田原城以外の城郭でも障子堀は確認され、丸山城（105、128）や河村城（115、116、129）があげられ、堀内の障壁としては玉縄城（52）でも確認されている。丸山城や河村城の障子堀は小田原城のそれと似ているとも受け取れるが、客観的なデータ分析を踏まえなければならない。また、竪堀は玉縄城（118）や津久井城（123、124）で確認されているが、形態はそれぞれ異なる。個別遺構の精査をもとに各城郭の共通項と差異を検討していく必要があるだろう。（松葉）

## 2. 県内で発掘された城館と堀の調査状況

神奈川県内では、県史や各市史等に城館として数多くの遺跡が紹介されている。それらの遺跡の中には伝承地として紹介されているものの発掘調査が実施され報告書が刊行されている遺跡は少ない。その中でも、中世前期の都市である鎌倉は、武家屋敷として推定される遺跡は数多く存在するが、小規模な発掘調査が多く、発掘調査により武家屋敷の様相が解明された遺跡はさほど多く、大部分の遺跡は中世都市としての土地利用が解明されていることが多い。また、中世後期の都市である小田原市は、後北条氏の本城である小田原城があり城下を中心として数多くの発掘調査が実施され報告書が刊行されている。2009年から中世プロジェクトチームでは神奈川県内の城館集成を行ない、城跡、砦、堀、土塁等の中世城館として発掘調査報告書が刊行されている遺跡として、横浜市2遺跡5ヶ所、川崎市1遺跡1ヶ所、横須賀市4遺跡11ヶ所、平塚市7遺跡29ヶ所、鎌倉市8遺跡22ヶ所、茅ヶ崎市1遺跡2ヶ所、逗子市3遺跡10ヶ所、相模原市2遺跡13ヶ所、三浦市1遺跡1ヶ所、秦野市2遺跡2ヶ所、厚木市3遺跡3ヶ所、大和市3遺跡7ヶ所、伊勢原市3遺跡10ヶ所、海老名市3遺跡4ヶ所、綾瀬市2遺跡2ヶ所、松田町1遺跡1遺跡、山北町1遺跡3ヶ所を集成した。続いて、集成した遺跡の中で堀が確認されているものについて、堀の規模、薬研堀、箱堀等の形態、土塁や土橋の有無、障壁の有無等の堀底の形状等についての分類を行った。

現在各地域で調査されている城館の大部分は、住宅の建て替え等の小規模な調査が多く堀、土塁、柵列等

の一部分のみが調査される場合が多く、城館の様相が不明な部分が多いのが現状である。しかし、その中でも城館の整備等を目的とした発掘調査が行われて城館の性格が解明されているものもある。以下、各市域での発掘調査である程度の城館についての状況が解明されているものについて述べる。

#### 茅ヶ崎城〔1～4〕

横浜市都筑区茅ヶ崎に所在。城跡は「じょうやま」と呼ばれ、早淵川南岸の先端部に位置する。扇谷上杉氏の拠点と考えられ、14世紀末から15世紀代に使用されたと考えられる。城跡は、西郭・中郭・北郭・東郭・東下郭・東北郭の6郭と根小屋地区から構成される。1990年、1993年、1994年、1998年、2003年、2005年の7回にわたってトレンチによる発掘調査が実施されており、調査では、空堀、土塁、柵列、溝状遺構、土坑、ピット、地業面等の遺構が調査されている。遺物は見込に渦巻文を持つかわらけ、常滑甕・瀬戸灰釉皿・播鉢等の国産陶器、青磁碗などの舶載磁器、銭貨、板碑、金属製品、鉄滓、壁土等が多数出土している。各トレンチで確認された堀は、堀上幅2.3m～5.8m、堀底幅1.1m～3.9m、深さ1.0m～4.5m、堀の傾斜角50°～80°をそれぞれ測る。堀の形態はトレンチ調査という制約から不明なものが多いが確認されたものは箱堀状を呈し、堀底の形態は堀障子が堀の方向に直交している形態のものが確認されている。

#### 玉縄城〔50～58、118〕

鎌倉市植木、玉縄に所在し、標高50m～80mの丘陵上に造られた城である。永正9年(1512)に、小田原の伊勢宗瑞(北条早雲)により、相模国に勢力を張る三浦氏の攻略のために築城された城で、関東各地に造られた後北条氏の支城の一つである。現在は、学校建設や宅地造成により城域は分断され、旧状を残している部分は少なくなっている。周辺には、「城山」「城宿」「城廻」等の地名が確認できる。1987年～2000年に個人住宅建設やマンション建設のための発掘調査が実施された。調査では、堀(堅堀・堀切)、切岸、土塁、平場、溝状遺構、土坑、地業面等の遺構が確認されている。遺物は、青磁・白磁・明染付等の舶載磁器、瀬戸灰釉皿・播鉢等の国産陶器、かわらけ、銭貨、漆器、金属製品、石製品等が出土している。確認された堀は、堀上幅9.0m～20.0m、堀底幅1.3m～2.0m、深さ3.5m～10.8m、堀の傾斜角34°～70°をそれぞれ測る。堀底に土橋、段が確認でき外側には土塁も確認できるものもある。堀底の土橋は堀障子の役割をするものと考えられている。また、複数の時期が確認でき薬研堀から箱堀へ作り直されている堀も確認されている。

#### 津久井城〔78～88、121～124〕

相模原市津久井町字根小屋あり、相模川の谷口部右岸の独立峰の城山に位置する。津久井城は後北条氏配下の内藤氏の居城として、甲斐国との境目の城としての役割を担った城である。発掘調査は、1996年～2005年にかけて「御屋敷跡曲輪」において発掘調査が実施された。調査では、堀(箱堀・堅堀)、土塁、礎石建物、掘立柱建物、石列、土坑群、虎口等の意向が確認された。また、2008・2009・2010年には公園整備を目的として、本城曲輪・米曲輪・土蔵曲輪、馬場等でトレンチによる調査が実施された。調査では、階段状遺構、石敷、石列、地業面等が確認され、米曲輪から本城曲輪へと通じる虎口、門跡と考えられる礎石建物が確認され、具体的な登城ルートの一部が明らかとなった。遺物は、白磁坏・明染付碗・合子等の舶載磁器、瀬戸窯・常滑窯などの国産陶器、かわらけ、鉄製品、石製品、銭貨等が出土している。確認された堀は、堀上幅2.5m～9.0m、堀底幅0.6m～4.1m、深さ1.1m～5.1m以上、堀の傾斜角22°～87°をそれぞれ測る。堀は、

東側馬場で上下2段に連ねた箱堀、北方向から南方向へ向かう堅堀、堀底に大型の礫・砂利を充填し平坦面を造成している部分、テラス状の付帯施設が確認されている。

#### 深見城〔98・99〕

大和市深見に所在し、相模野台地から東へ張り出す舌状台地の東側、境川により形成された河岸段丘状に立地する。城跡は、15世紀中頃に実在した「山田伊賀守入道經光」の居城であることが『新編相模国風土記稿』に記されているのみで詳細は不明である。発掘は、1984～1986年と1999～2000年の2回にわたりトレンチによる調査が、主郭・外郭・内堀・外堀・天竺坂堀の地点で実施されている。調査では、堀、土塁、土橋、虎口、井戸、土坑が確認された。遺物は、青磁碗等の舶載磁器、瀬戸縁釉皿・常滑窯甕等の国産陶器、瓦質火鉢、かわらけ、石製品、銭貨等が出土している。確認された堀は、堀上幅3.3m～20.0m以上、堀底幅2.0m～4.5m、深さ2.2m～8.3m以上、堀の傾斜角40°～85°をそれぞれ測る。確認された堀には、法面の角度が途中で変化するものが確認されている。外堀が2本存在することが確認され、天竺坂堀では薬研堀から箱堀へ改変されたものも確認されている。発掘調査の結果、城は出土遺物等から判断して14世紀末頃から15世紀中葉と16世紀代の2時期に城地が利用されていることが指摘されている。

#### 丸山城〔102～106、126～128〕

伊勢原市下糟屋に所在し、北側を歌川、南側を渋田川の谷に挟まれた東西に細長い尾根に立地している。城跡は、鎌倉時代初期の糟屋左衛門尉有季の居城とされているものである。現在城跡は、ほぼ中央部分を国道246号線により分断されてはいる。城域は東海大学病院、高部屋神から上町並までの成瀬地区に広がっていると推定される。発掘調査は1993年～2009年の間に、第1東海自動車道拡幅にかかる調査、東海大学病院内の調査、成瀬地区の詳細分布調査、成瀬地区土地区画整理事業、丸山地区土地区画整理事業に伴ってそれぞれ実施されている。調査では、中世後半と推定される大規模な溝、堀切、土塁、竪穴状遺構、地下式坑等が発見されている。遺物は、龍泉窯及び同安窯系の青磁、古瀬戸壺・常滑窯甕・片口鉢・渥美窯甕等の国産陶器、瓦質火鉢、かわらけ、銭貨、瓦等が出土している。確認された堀は、堀上幅4.1m～17.0m、堀底幅0.4m～10.0m、深さ1.1m～9.8m、堀の傾斜角30°～70°をそれぞれ測る。丸山地区では、堀内部に不規則な間隔で土橋状の掘り残しがあり、その間を深く掘り下げて障子堀状にしているものが確認されている。また、箱薬研形を呈した堀が鈎の手状に屈折するように掘られたものも確認されている。また遺物の中には、横浜市の茅ヶ崎城で出土したものと同様に見込に渦巻文を持つかわらけが出土している。

#### 早川城〔112〕

綾瀬市早川に所在し、目久尻川に向かって舌状に張り出す台地の南端部に位置する。城跡は、鎌倉時代の御家人である渋谷氏一族に関係する者の居城であるとされているが不明な部分が多い。発掘調査は1989年～1994年までの6次にわたりトレンチにより実施された。調査では、堀切、土塁、物見塚、柱穴群、道状遺構、溝状遺構、土坑等が確認されている。遺物は、かわらけ、火舎等が出土している。調査で確認された堀は、堀上幅3.5m～約14.0m、堀底幅0.8m～2.4m、深さ0.3m～6.7m、堀の傾斜角20°～70°をそれぞれ測る。確認された堀の底面には、段が確認されたものや、堅堀と重複して確認されたものもある。築城は、伝承によると12世紀末頃までさかのぼるがその当時の遺物の出土はない。調査により出土した遺物などから14世紀代



から15世紀代にかけて使用されていたと思われる。また、周辺調査では、早川城の関連遺跡として、板碑が多く出土している「びわみ堂跡」と渋谷氏関連の伝承を持つ「長泉寺」の2ヶ所の調査が実施されている。

#### 河村城〔115・116、129〕

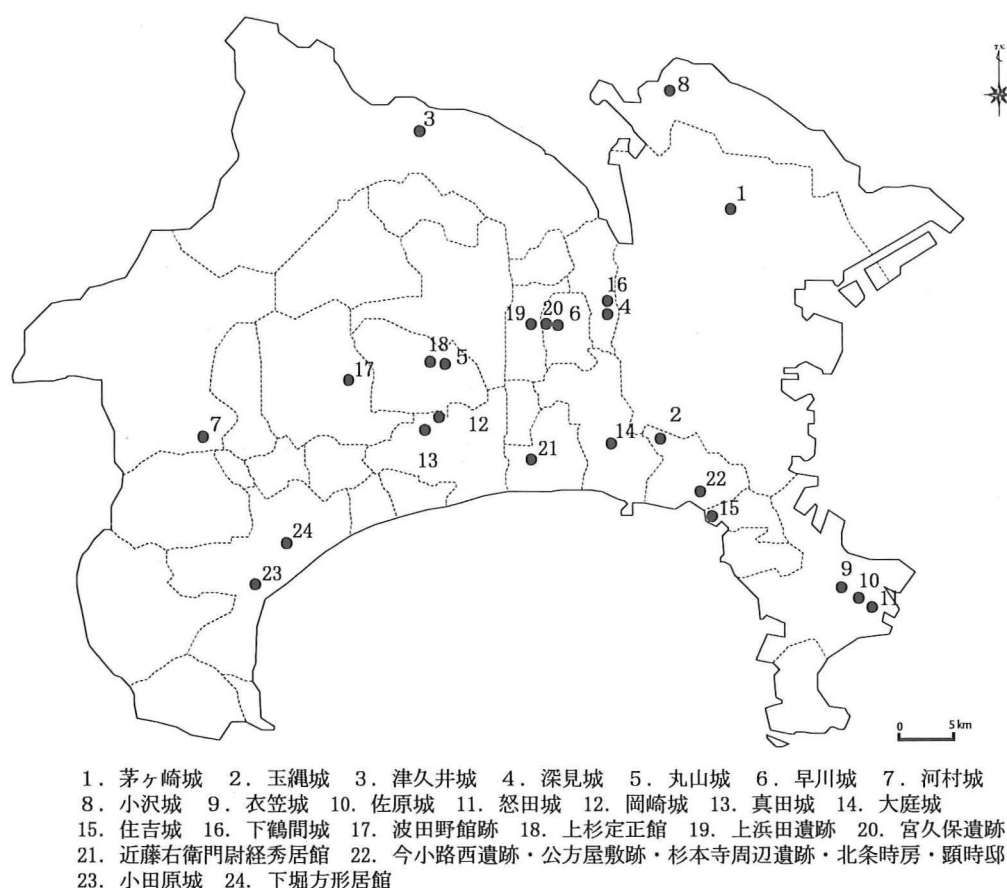
足柄上郡山北町に所在。酒匂川中流域左岸の城山と呼ばれる独立丘陵上に立地する。戦国時代には、後北条氏の甲斐国武田氏に対しての支城として存在し、天正18年(1590)の豊臣秀吉の小田原攻めにより廃城となったとされている。平成元年度より詳細分布調査やトレンチ調査が実施された。1992年～1994年度に詳細分布調査が実施され、根小屋とされる地域で建物址、2つの形態の堀跡が発見され、時代の異なる館跡の存在が推察された。平成15～17年度には史跡整備に関連した発掘調査が実施された。調査では、堀切、空堀、土橋、橋脚遺構、堅穴状遺構群、地業面等の遺構が調査されている。遺物は戦国期の染付・青磁・白磁等の舶載磁器、常滑窯甕・古瀬戸梅瓶などの国産陶器、かわらけ、鉄製品、銭貨等14世紀後半から16世紀後半までの時期のものが出土している。調査で確認された堀は、堀上幅6.0m～約25m、堀底幅0.5m～16.6m、深さ3.0m～12.0m、堀の傾斜角40°～70°をそれぞれ測る。堀切では、障子堀を確認した。また、数次にわたる発掘調査により古絵図に記載のない空堀も確認されている。

#### その他の城館

以上7つの城跡について概略を述べたが、ここでは県内のその他の城館の状況について述べる。大部分の城館は個人住宅の建て替え等小規模の発掘調査が多く、状況が不明なものが多い。その中でも、堀跡、土塁、土橋等の城館に係る遺構が確認されているものについて簡単に述べる。川崎市の小沢城(6)では、尾根の平場を開削し堀割・切岸・土塁を構築していることが確認されている。横須賀市の衣笠城(7～12)では、土橋状遺構や各平場間で切岸が確認されている。また、城跡内の経塚の調査から出土した遺物から三浦氏との関係が指摘されている。同市佐原城(13～15)は、三浦大介義明の七男の佐原十郎義連の居館と考えられており、城跡に係る段切が確認されているが、それ以外の遺構は確認されていない。同市怒田城(17)では、2条の空堀と土橋状遺構が確認されている。平塚市の岡崎城(18～27)では、堀跡、土塁状遺構、曲輪の一部が確認され、外郭的性格を持つ方形囲郭の一部も確認されている。同市真田城(34～37)では、城趾と推定される台地で丘陵縁辺部をめぐる堀や虎口が確認されている。藤沢市大庭城(63～66)では、丘陵全体が包蔵地として確認され、堀切、土塁、土橋、郭状遺構等が確認されている。逗子市住吉城(70～72)では、主郭とされる「げんじがやと」がを取り囲むように数段の平場、切岸状遺構、土塁状遺構が確認されている。大和市下鶴間城(97)は、山中修理助貞信の旧跡との伝承があり、土塁、腰郭、堀状遺構、掘立柱建物、溝状遺構等が確認されている。居館跡としては、秦野市波多野氏館跡(90)、伊勢原市上杉定正館(101)、海老名市上浜田遺跡(108)、綾瀬市宮久保遺跡(113)、茅ヶ崎市近藤右衛門尉経秀居館(119・120)等で調査が実施され、居館に係る溝状遺構、掘立柱建物、柵列、井戸等の遺構や、当該期の遺物が出土している。鎌倉市内では、小規模な調査が多いが今小路西遺跡(46)、公方屋敷跡(47・48)、杉本寺周辺遺跡(49)、北条時房・顕時邸(59)等では、武家屋敷に係る多くの遺構や舶載陶磁器、国産陶器等が多数出土している。調査事例の増加と共に様相が解明されつつある。小田原市内では、小田原城の城下を中心として300ヶ所以上の発掘調査が実施されており、二の丸・三の丸を中心として、後北条期の障子堀や石垣、屋敷跡等が確認され、当該期の遺物も多く出土している。近世小田原城の石垣や堀等の遺構の調査事例も増加し

ている。また、2006年と2008年に調査が行われた、同市下堀に所在する下堀方形居館では二重に巡る堀が確認されている。下堀方形居館は、中世の豪族志村氏の屋敷地といわれている。居館は、東西103m、南北129mの規模を持ち、北西隅と西側に土塁が残存している。堀からは、龍泉窯青磁碗・小鉢・景德鎮端反皿等の舶載磁器、瀬戸直縁大皿・常滑窯片口鉢等の国産陶器、かわらけ、漆器碗、筭等の12世紀から16世紀にかけての遺物が多数出土している。

以上、神奈川県内の城館跡についての発掘調査の現状を述べたが不明な部分が多い。今後の発掘調査の増加による資料の蓄積がまたれる。(宮坂)



第1図 城館位置図

# 註

- (1) 中世の「城館」・「居館」という名称は、問題点が指摘されている(中澤 2006、松岡 2009など)。中世初期の「館」は国司や地方を支配する豪族たちの拠点であったと指摘され(五味 1993)、中世前期の武士の住居は「屋敷」と表現されることが多いという(岡 1995)。また、関東以西における中世的な「城」の用例は、武士よりも寺社勢力の方が先行し、「城」や「館」は武士固有の空間ではないと指摘される(中澤 2006)。これらの用語は使い分けが必要と考えられるが、発掘調査から述べる場合、遺構の性格を決めることが困難である場合も多い。そのため、本稿では従来の慣例に沿って、地域において身分の高い階層の日常の住居や拠点を「居館」、軍事的な防御性を有した戦時の拠点を「城」、それらの総称を「城館」としておく。



- (2) 堀及び溝の断面形状は、V字形を葉研形とし、報告書の記載と異なる場合があることをお断りしておく。
- (3) 本プロジェクトの「神奈川の中世城館(1)～(3)」で取り上げた発掘調査報告書は、文献名を省略し、文献番号としている。

#### 引用・参考文献

- 赤星直忠 1959 『鎌倉市史 考古編』 吉川弘文館
- 天野賢一・長澤邦夫・林雅恵 2010 『下堀広坪遺跡第Ⅰ地点・下堀塚田町遺跡第Ⅰ地点・下堀道上町遺跡第Ⅰ地点』  
かながわ考古学財団調査報告259
- 荒川正夫 2003 「中世城館の成立と地域性」『中世東国の世界1 北関東』 高志書院
- 石井進・萩原三雄編 1991 『中世の城と考古学』 新人物往来社
- 石丸熙 1978 「中世鎌倉の一側面―初期の都市防備体制を見る―」『三浦古文化』23 三浦古文化研究会
- 市川正史ほか 1993 『宮ヶ瀬遺跡群Ⅲ』神奈川県埋蔵文化財センター
- 市川正史 1997 『宮ヶ瀬遺跡群Ⅸ』かながわ考古学財団調査報告15
- 市川正史ほか 1997 『宮ヶ瀬遺跡群Ⅺ』かながわ考古学財団調査報告17
- 井上哲朗 2000 「障子堀の分類と編年」『千葉県文化財センター研究紀要』20 千葉県文化財センター
- 宇都洋平 2010 「木組み側溝から見た鎌倉遺跡群の区画」『中世都市研究』15 中世都市研究会
- 大木衛ほか 1980 『日本城郭大系』6 新人物往来社
- 大三輪龍彦ほか 1983 『研修道場用地発掘調査報告書』 鎌倉市鶴岡八幡宮
- 岡陽一郎 1995 「中世居館再考 その性格をめぐって」『中世の空間を読む』 吉川弘文館
- 岡陽一郎 2004 「幻想の鎌倉城」『中世都市鎌倉の実像と境界』 高志書院
- 岡陽一郎 2006 「鎌倉の変容」『鎌倉時代の考古学』 高志書院
- 神奈川県考古学会 2002 『かながわの中世～鎌倉から小田原へ～』平成13年度考古学講座発表要旨
- 神奈川県考古学会 2006 『神奈川の城館跡』平成17年度考古学講座発表要旨
- 河野真知郎・宮田眞・瀬田哲夫・清水菜穂 1990 『今小路西遺跡(御成小学校内)発掘調査報告書』 鎌倉市教育委員会
- 熊谷満 2011 「大倉幕府跡 雪ノ下三丁目637番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』27 鎌倉市教育委員会
- 五味文彦 1993 「館の社会史」『神奈川地域史研究』11 神奈川地域史研究会
- 近藤真佐夫ほか 1989 『堀之内東遺跡』 日本窯業史研究所
- 齋木秀雄 2006 「鎌倉の館と城―鎌倉城を中心に―」『神奈川の城館跡』 神奈川県考古学会
- 齋藤慎一 2003 「戦国大名城館論覚書」『戦国時代の考古学』 高志書院
- 齋藤慎一 2008 「戦国大名北条家と城館」『中世東国の世界』3 高志書院
- 佐々木健策 2008 「相模府中小田原の構造―小田原城に見る本拠地と大名権力―」『中世東国の世界』3 高志書院
- 佐々木健策 2010 「小田原本城にみる築城技術」『小田原北条氏の城郭―発掘調査からみるその築城技術―』東国中世考古学研究会
- 佐々木満 2008 「武田氏と北条氏の虎口・門」『中世東国の世界3 戦国大名北条氏』 高志書院
- 霜出俊浩 2006 「東田原中丸遺跡―中世の在地領主居館跡―」『神奈川の城館跡』 神奈川県考古学会
- 鈴木敏中 2010 「山中城」『静岡県における戦国山城』 静岡県考古学会
- 鈴木庸一郎・菊川英政ほか 2001 『『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査』 神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・(財)

かながわ考古学財団

- 千田嘉博 1989 「中世城郭から近世城郭へ」『月刊文化財』305 第一法規出版
- 富永樹之 2009 「神奈川県における方形居館とその周辺の景観―茅ヶ崎市上ノ町遺跡と清川村表の屋敷遺跡を中心に―」  
『扶桑 田村晃一先生喜寿記念論集』 青山考古学会
- 中井均 1987 「中世城館の発生と展開」『物質文化』48 物質文化研究会
- 中井均 1991 「中世の居館・寺そして村落」『中世の城と考古学』 新人物往来社
- 中井均 2009 「検出遺構よりみた城郭遺構の年代観」『戦国時代の城―遺跡の年代を考える―』 高志書院
- 永井智教・吉田智哉ほか 2006 『深谷城跡（第8～11次）』 深谷市教育委員会
- 中澤克昭 1999 『中世の武力と城郭』 吉川弘文館
- 中澤克昭 2006 「居館と武士の機能―出土鉄族と狩猟をめぐって―」『鎌倉時代の考古学』 高志書院
- 西股総生 1999 「後北条の築城技術における虎口形質の獲得課程」『織豊城郭』第6号 織豊城郭研究会
- 西股総生 2001 「中世城郭における遮断線構造」『中世城郭研究』15 中世城郭研究会
- 萩原三雄 2010 「戦国期東国の築造技術と諸問題」『小田原北条氏の城郭―発掘調査からみるその築城技術―』 東国中  
世考古学研究会
- 橋口定志 1987 「中世居館の再検討」『東京考古』5 東京考古談話会
- 橋口定志 1990 「中世東国の居館とその周辺」『日本史研究』330 日本史研究会
- 橋口定志 2004 「中世前期居館の展開と戦争」『戦争1―中世戦争論の現在―』 青木書店
- 橋口定志 2005 「東国の武士居館」『戦国の城』 高志書院
- 広瀬和雄 1988 「中世村落の形成と展開」『物質文化』50 物質文化研究会
- 広瀬和雄 2006 「領主居館の成立と展開―西日本を中心として―」『鎌倉時代の考古学』 高志書院
- 藤木久志監修 2005 『戦国の城』 高志書院
- 松岡進 2009 「東国における「館」・その虚像と原像」『中世城郭研究』23 中世城郭研究会
- 松葉崇 2010 「相模国所在の城館跡に見る築城技術」『小田原北条氏の城郭―発掘調査からみるその築城技術―』 東国  
中世考古学研究会
- 馬淵和雄 1993 「大倉幕府周辺遺跡群 二階堂字荏柄38番1」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9 鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄・岡陽一郎・秋山哲雄 1996 「北条小町邸跡（泰時・時頼邸） 雪ノ下一丁目377番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財  
緊急調査報告書』12 鎌倉市教育委員会
- 峰岸純夫・萩原三雄編 2009 『戦国時代の城―遺跡の年代を考える―』 高志書院
- 宮田眞・手塚直樹 1991 『政所跡』 政所跡発掘調査団
- 村田修三 1987 『図説中世城郭事典』 新人物往来社
- 八巻孝夫 1990 「後北条氏領国の馬出」『中世城郭研究』第4号 中世城郭研究会
- 八巻孝夫 1993 「北条氏照の城郭―後北条氏の城郭における氏照系城郭試論」『中世城郭研究』第7号 中世城郭研究会